

# LEADERSHIP CHALLENGE

## 大隈塾LCレポート vol.10

2014年度最終回となる第10回大隈塾リーダーシップ・チャレンジは1月17日（土）18日（日）、「NEWS23」のアンカー、毎日新聞の岸井成格さん、「東北食べる通信」の高橋博之さん、そしてジャーナリストで大隈塾ファウンダーの一人高野孟さんに講義していただきました。

20年前の1995年1月17日、阪神・淡路大震災が起きました。今回は、犠牲者への鎮魂、遺族への祈りの黙祷から始まりました。

そして翌18日、高野孟さんの講義後に修了式。田原総一郎塾頭から受講生一人ひとりに修了証書が手渡されました。

### 第11回講義

講師：岸井成格氏（「NEWS23」アンカー）

テーマ：「歴史と暦から読み解く2015年日本の政治と経済」



1995年の阪神・淡路大震災のとき、政治部長だった。社会党が分裂の危機にあって、泊まり込みした明け方のことだった。あれから20年が経った。

60年前はどうだったか。戦争が終わって10年の1955年、右派社会党と左派社会党が合併して日本社会党になり、対抗して自由党と民主党がくっついて自由民主党ができた。いわゆる55年体制の始まりだった。

戦後50年の1995年、阪神・淡路大震災のときに「村山談話」が出された。これは戦争へのお詫びであり、続いて「河野談話」では従軍慰安婦についてお詫びをした。

戦後70年の今年、安倍晋三総理は「安倍談話」を出す。これは、(1)村山、河野談話を全体として継承する(2)平和国家としての歩みを記す(3)積極的平和主義で世界に貢献する、としている。

村山富一さんも河野洋平さんもリベラル系の人だ。自民党の保守派からすると、とても受け入れがたいのが村山談話であり河野談話である。安倍さんは第1次内閣のときに自分の言葉で談話

を出したかったができなかった。そのリベンジが今回にあたるが、就任当初から、各国が注目しているし、変更するなどメッセージを送っている。

加えて、尖閣問題、竹島問題以来、日本は近隣外交が行き詰まっている。安倍さんはいろんな国を訪問しているが、中国と韓国には単独でわたっていない。外交の基本である近隣外交がうまくいっていない。

戦後70年、2015年の今年は、色々な意味で節目の年になる。

仕事で一皮むけた瞬間。入社してすぐに熊本支局に配属になった。ちょうど水俣病が発生したときだった。私の新聞記者としての原点が、水俣病取材だった。水俣病は運動神経がやられてしまい、声は聞こえているし理解はできるのだが、それに対する反応ができない。筋肉が動かないのだから、しゃべることも頷くこともできないのだ。

同時に、サリドマイド、ハンセン病なども取材した。

公害が大問題となり、国会は「公害国会」となった。立法府だけでなく、行政府も当時の厚生省と通産省が激しく対立した。公害対策、環境対策の役所を作ることになり、私が「環境庁」という名前をつけた一人になった。

入社以来、一時期は「サンデー毎日」にいたり社長室長など務めたが、基本的にはずっと政治部で働いている。

記憶に最も強く残っているリーダーは田中角栄さんだ。判断が早く、意志がぶれない。小学校しか出ていないが、議員立法の数が今でも最多で33本、閣僚や政調会長などのときに作った法律を入れると100本を超える。官僚たちとも互角に渡り合えるぐらい法律に精通していた。実は、そうとう努力をした政治家だった。

#### 【受講生のレポートより】

水俣病の取材に始まり、公害問題・社会問題を追いつけていった話は、その過程で何度も何度も「一皮むけた瞬間」があったのだろうなと感じさせる内容であった。また、私は、現在の国民の「公害に対する嫌悪感」や「環境重視の視線」という価値観が所与のものであると考えすぎていたことを反省した。

現在の公害や環境に対する国民の感度というのは、過去の悲劇的な歴史やメディアによる報道の積み重ねによって形作られたものだったんだと気付かされた。むしろ、「環境への意識」は20世紀における報道による世論形成（価値観形成）の中で、最も評価されるべきものかもしれないと思った。

=====

政治記者を長年務めた岸井先生が最もリーダーに相応しいと感じた人物は田中角栄元首相であった。コンピューター付きブルドーザーの異名を持つ彼は、官僚に対抗できるほどの専門知識を有

すると同時に、人心掌握に長け人に好かれる人物であったとのことであった。大隈塾でこれまで語られてきたリーダー像にも読書等によるインプットは欠かせないものであり、改めて“知識“を深める重要性を再認識した。同時に、周囲を気持ちよく働かせる配慮・気遣いが加わればまさに理想のリーダー像に近づくのは間違いない。

## 第12回講義

講師：高橋博之氏（「東北食べる通信」編集長）

テーマ：「創刊たった1年でグッドデザイン賞」



岩手県議会議員だった。2期つとめたが、議場の傍聴席はガラガラ。有権者からチェックされないから、政治家はやりたい放題だ。

県知事選挙に出た。落選した。政治をやめて一次産業に入ったら、そこは政治と同じ。一次産業の人たち以外も危機感を口にするが、自分たちで食べ物を作ることはない。自分の問題だとは思っていない。一次産業の人たちでも、「こんな仕事」と子どもたちに継がせようとしな、継ごうとしな。平均年齢は上がっていくが、後継者数は下がっていく。

大分のある町で、小児科の医者がいなくなった。小さい子どもを持つお母さんたちが立ち上がったが、役所ではどうにもならなかった。ふと、自分たちがどういうことをしていたのか、自分たちで振り返った。みんなで「コンビニ受診」していた。つまり、ちょっとしたことで医者にかかる、夜中でも医者にかかる、休日でも医者にかかる。タダだから。

これでは小児科がいなくなるもの当たり前だと、当事者意識が芽生えて、自分たちから変わっていかうと仲間を広げていった。そうしたら、小児科の医者が帰ってきてくれた。

食に関しても、すべての人が当事者だ。去年はコメの価格が暴落して、コメ農家が大変だった。消費者も「大変だ」といいながら、しかしコメは安い方がいいに決まっている。コメ農家の顔が見えないからだ。生産者の顔が見えないからだ。生産者との関係ができて、共感できればいろんなことが変わっていくだろう。そう信じて「東北食べる通信」を立ち上げた。

「東北食べる通信」は、生産者がどんな思いでつくっているか、どんな歴史があるのか、どんなエピソードがあるのか、生産者のストーリーを綴っている。そしてその生産者がつくった野菜、獲った魚介類、肉、などを食べる。

生産者のストーリーを通じて食べるから、その意味がわかる。生産者に理解したり感謝したり。また、読者たちがSNSで感想や料理法などを伝え合っているのを生産者が読んで驚く。メッセージのやりとりをしながら、その環が広がっていく。

消費者が生産者を手伝うようにもなった。この関係性が、とても贅沢だ。この仕組みが、グッドデザイン賞をもらうことになった。

自分の認める価値で、しなやかにつながっていく。農協や漁業とも付き合っていく。しかし、基本は生産者と消費者が直接結びついているCSA（Customer Supported Agriculture）。

### 【受講生のレポートより】

「東北食べる通信」の内容自体にももちろん感心しましたが、何よりも、高橋先生の行動力にとっても感銘を受けました。何かすごいことを思いついても実際に行動に移さない限り意味はないのだと思います。

高橋先生のご指摘の通り、便利になりすぎて、普段生産者の顔を思い浮かべることがないこと、消費者側の共感力がないとのコメントを聞いて、昔、テレビで、マザー・テレサが来日したときに「物質的に豊かな人は、他人に無関心だ」と話したというエピソードを思い出しました（どの番組で取り上げられていたかも覚えていないので、事実関係はわかりませんが）。それを聞いたときは自分も小さかったこともあり、豊かな国に住んでいると思っていたところ、「心が貧しい」と言われてとてもショックだったのを覚えています。今はその通りだなと思います。

=====

田植えで収穫したお米は、普通にスーパーで購入したお米より大事に食べましたし、食卓での話題も弾みました。これは、食材にストーリーがあったからだと思います。もし「食べる通信」を利用出来たら、土地の様子や、作った人の苦労といったストーリーがありますので、食卓もより一層楽しいものになると思います。年に二三回でもそういう機会を意識して持っていきたいと思います。

=====

色々なキーワードとなる言葉を収集できました。

「観客席からグラウンドへ一歩降りてみる。」私ができる事は何？私がする事は何？当事者になることで、赤ちゃん経営から大人の経営に一歩ステップアップするのだろう。

「思い込みを捨てると違う事が見える」知らない事に対する偏見を捨て、目の前の真実を直視する事をできるようになるとよいだろう。

「これでは命が喜ばない」感動を覚える時、幸せを感じる時、安心を感じる時、何かを乗り越えた時等で感じる感情を一言で表すとこの表現かもしれない。個人的にとっても染み入りました。

「関係性はぜいたく品の価値がある」物の良さ、価格の安さ、安定供給、安定品質、対応力等物作りをベースに考えている私自身の課題は、どのような付加価値をお客様に提供できるかです。通常はどうしても目で見えるものを追いかけてしまいますが、お客様が感じる目に見えない価値の一つとしてキーワードを頂きました。

=====  
都市部の消費者は国産食材に対する強い需要を持つ一方、生産者に関する情報に疎くせいぜい産地を把握して購入するのが現状である。日本の食料自給率は39%（カロリーベース）しかなく、将来的には世界人口の急増や地球温暖化影響により食料調達難のリスクが極めて高いにも関わらずこの状態である。“国産”には拘るが、このような将来のリスクを見据え、生産者になろうとする日本国民はどれほどいるのか？という問いかけにハッとさせられた。跡を継ぐ若者が減っているとはいえ何とかなると思っている人が大半で、自分が生産者になろうとは思ってもよらなかったが、これこそが「一言で国を滅ぼす言葉はどうにかならうの一言なり。幕府が滅亡したるはこの一言なり」である。

### 第13回講義

講師：高野孟氏（ジャーナリスト）

テーマ：「時代の先を走りすぎた1人の男の物語」

加藤登紀子編『農的幸論／藤本敏夫からの遺言』（角川ソフィア文庫、09年刊）

藤本敏夫さんは、同年代で、学生運動の時代を一緒に生きた仲間の一人。私は早稲田大学で、藤本は同志社。彼は全学連の委員長をしていた。

藤本は、稀代のアジテーターだった。みんなステンカラーコートを着ていた時代に革ジャンを着て演説していた。「農は誰もがやらなければならない、21世紀の課題である」と言っていて、鴨川に田んぼと畑をもち、「鴨川自然王国」を作った。私もやがて月に1、2回、田植えや、稲狩り、畑仕事をするようになった。春夏秋冬、いろんな体験をし、友達を作り、土に触れる。

私も還暦が過ぎたらここに移ろうと思っていたので、その前に藤本が亡くなったが、鴨川に移った。



この『農的幸論』は1972年、今から40年前に書かれた本だが、インテリジェンスのレベルの高さは40年の時代の流れを差し引いても高いものがある。早稲田大学の隈塾で10年間ゼミをやっていたテーマが「インテリジェンスの技法」というテーマだった。リーダーたるもの、いかなる時もインテリジェンスが重要である、と。インフォメーションもインテリジェンスも「情報」と翻訳するが、いわゆる情報通というのはインフォメーションの量が多いだけ、自分の言葉で再

構築するのがインテリジェンス。日本は大学に至るまでインフォメーション教育を行っている。アメリカは大学ではインテリジェンスを学ぶ。

ハーバード大学の教員に聞いたが、本を読むという行為においてもインフォメーション型とインテリジェンス型は異なる。つまり、概念のとらえること、まとめることはインフォメーション型であり、この本に書いてある方法論で他の議題についてどのように考えるか、自身の意見をいうのがインテリジェンス型だ。我々ジャーナリストもそうで、情報をたくさん集めてそのまま並べてもしょうがない。重要な情報をピックアップし、整理し、仮説を立てる。これがインテリジェンスである。アメリカのCIAは世界中にブランチを持っている。ジャーナリストもCIAも9割方パブリックにされていることを読み解く、残りの1割は人的なつながりで確かめている。

第一次情報から第二次情報へ、事実情報から集約情報へ、知識から知恵へ、物知りから決断へ、量から質へ、集めるから捨てるへ。

インテリジェンスとは、たとえば三角形の一角が論理力（頭）、もう一角が直観力（体）、そして想像力（心）。直観力が一番大切だと思っている。若い方は論理力があるが、一番鍛えにくいのが、直観力。これが藤本が言っていることだが、土を耕すことを通じて、直観力を養う。動物と同じくらいの直観力を持っていないといけない。土に根ざした暮らしが人間にとっての根本。今時の子どもたちは、土に触れないで生きている。田植えの時、田植え足袋もあるが、はだしで入れ、と言っている。足の裏は第二の脳と言われているくらいである。足の裏で直観力を取り戻すのも田植えのテーマ。土まみれというのは土で汚れるという考え。これが近代合理主義である。

偽物を本物だと勘違いしてはいけない。多数の意見が正しいとは限らない。仕事を覚えてくると屁理屈だけが上手になっていくが、論理力だけ伸びて、直観力がなくなっていく。

#### 【受講生のレポートより】

グローバル化が進んでいく時、私たちに問われるのは日本人や日本をきちんと理解しているか。欧米のやり方を真似するのではなく、自分たちの基礎をしっかりとさせて グローバル化のエッセンスを加える事が重要だと考えています。土と触れる事、農作物と身近になる事が私の中にある日本人としての人間性や原点をきちんと見直す事につながるかもしれない。また、土に触れる事で、自身のアウトプット不足の原因であるインテリジェンス能力向上にもつなげたい。感性を磨き、勘を磨く、第六感を磨く事になると思う。難しい事を考えないで、自分の子供たちと土に接する機会を作っていく事、これが全てのスタートということですね。

=====  
リーダーに必要な資質として「論理力」「想像力」「直観力」を挙げ、直観力の修練が最も困難であるとのお話が印象に残っている。確かに、日々、他者が分析・検討した資料を読み「結論はこれでどうかな〜？」と思い悩んでいる身としては、実感がある話であった。  
=====

大隈塾で10ヶ月間やってきたことが見事につながりました。私たちは自分が見える範囲でのみ、ものを考えがちですが、経験したことがないから見えていなかったということにも価値があることに気づかされました。そのひとつが農のある生活ということなのでしょう。そう考えると、田植え稲刈り以外にも、例えば政策シミュレーションも同じことで、知らなかった、経験してこなかったというだけで、自分のアンテナに引っかからないことが多くあるように思います。今のイスラム国での一件や集団的自衛権についても関心を向けて考えられるようになったことが大隈塾での私の成果のひとつだと感じています。



大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.10

2015年1月31日発行

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 [mura@ta2.so-net.ne.jp](mailto:mura@ta2.so-net.ne.jp)

169-0051 東京都新宿区西早稲田1-9-19 アーバンヒルズ早稲田207

tel:050-3558-7527 mail:[ookuma\\_school@stonesoup.tokyo](mailto:ookuma_school@stonesoup.tokyo)